会話における接続詞「で」の文脈展開機能

Context Development Function of the Conjunction "de" in Conversation

劉　　洋
LIU YANG

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第56号　2023年12月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.56 2023

会話における接続詞「で」の文脈展開機能

劉　　洋*

目次

1. はじめに
2. 先行研究と問題の提起
3. 調査データの概要と分析方法
4. 結果と用例の分析
5.「で」の本質
6. おわりに

1. はじめに

日本語の日常会話には、「というか」を「ってか」のように短縮した表現が多く見られる。本稿では、これらの中で「で」という短縮表現に焦点を当てて検討する。

従来、「で」は接続詞「それで」、「そこで」の省略として扱われてきた[1]。過去の研究では、「で」に関するさまざまな視点からの考察が存在し、言語習得や談話の意味・機能、歴史的背景といったテーマで取り扱われている（参照：深川：2007、宇佐美：2013、椙本：1994、高橋：2001、権景姫：2003、石島・中川：2004、山本：2004、百瀬：2020）。しかし、佐久間（1992、2002）が提唱した「文脈展開機能」の系統的研究は未だ不足している。この論文では、佐久間の「文脈展開機能」[2]を基盤とし、連接の類型に囚われず、自然会話における「で」の使用法及び「で」の本質を分析する。2節では「で」の先行研究と問題点を概観する。3節で収集データと分析方法、4~5節では結果と具体例の分析を展開し、最終的に6節で結論を導く。

---

*　岡山大学大学院社会文化科学研究科院生博士後期課程二年

[1]　辞書によると、「で」は次のように解釈されている。
「それで。「会議は九時から始まりました。―、どんなことが決まりましたか」〔話し言葉に使う〕」（『新明解国語辞典（第八版）』,三省堂, 2020）
「接続詞「それで」の略。「―、見ると」」（『広辞苑（第七版）』,岩波書店, 2018）
「「で」は「「そこで」「それで」などの「そこ」「それ」が略され、助詞「で」が自立語化したもの」」（『日本国語大辞典（第二版）』,小学館, 2003）

[2]「文脈展開機能」は、「文章・談話の内部にある文脈を先へと展開させて、完結し、統一ある全体を形成して伝達する働きのこと」である。「話題・話」は、「伝達する情報の中心的内容を言語で表現したもの」である。（佐久間2002：166-167）

2. 先行研究と問題の提起

「で」という接続詞の意味機能に関しての先行研究は、既にある程度の進展が確認されている。その中でも、佐久間（2002）、権（2003）、山本（2004）、及び小出（2008）の研究が特筆すべきである。

具体的に、権（2003）は、「で」の意味機能を「話題接続」と「話題転換」という二大カテゴリに区分している。また、「話題接続」のサブカテゴリとして、「話題帰結（総括）」、「話題誘導」、「累加」、「解説」、そして「逆接」を設定し、「話題転換」のサブカテゴリとしては、「典型的な話題転換」と「周辺的な話題展開、話題喚起」を採用している。

また、山本（2004）の研究においては、「で」の意味機能は3類7種に区分されている。それぞれ、「順接型：のべたて型」、「添加型：のべたて型、添加要求型、話題展開型、既出文脈言及型、依頼を切り出し型」、及び「逆説型」に該当する。 これらの研究は具体的な用例の分析を通じて、「で」の意味機能の洞察を深めているが、連接の類型の観点と話の展開の観点が混在しているようである。たとえば、「累加」、「逆接」、「順接型」、「添加型」などは連接の類型の観点から分析されている一方で、「話題帰結（総括）」、「話題誘導」、「既出文脈言及型」、「依頼を切り出し型」などは話の展開の観点からの分析となっている。

さらに、小出（2008：38）は「で」の対話での基本的な機能を2点述べている。

1. 目下の話題や文脈に区切りをつけると同時に、そのあとに目下の関心事が続くことを示す。
2. 後続する「目下の関心事」とは、既出話題であったり、現話題の関連話題であったりするが、それらの内容を展開・補完するなどして、談話構造上の次のステップに進むことを示す。（p.38）

「で」が上記のような機能を果たすことは認識されているものの、この定義だけでは網羅できない用例も存在することが示唆されている。例示として、「で、そのあとは？」という発話において、「で」が示す意味は、前文との「区切り」を示すだけでなく、聞き手が先行する話の内容を認知し納得していることを暗示するものでもある。その後、「そのあとは」という要求に応じる形で「談話構造上の次のステップに進むことを示す」小出（2008：38）。また、「で」の後ろに続く話題は、「既出の話題」であることや「現話題の関連話題」であることに限らず、完全に現在の話題とは関連のない事柄が続く場合も存在する。具体的には、後に示す例（5）がその一例として挙げられる。

一方、佐久間（2002）によれば、接続詞としての「文脈展開機能」は「談話資料における重要な分析観点の一つ」（p.164）と位置づけられている。先学としての市川（1978）が分類した接続詞の連接類型に基づき、それぞれどのような「文脈展開機能」を持つかをまとめており、表1のように3

つの主要カテゴリと14のサブカテゴリが提案されている（佐久間2002：168）。この中で「で」の意味機能の位置付けにも言及している。具体的には、次の表で下線部により示されている。

表1 接続表現の文脈展開機能による分類

文脈展開機能	定義	連接類型 市川孝（1978）	接続表現の例
A 話題開始機能			
a1 話を始める機能	話を最初から始める.	転換型	ソレデハ・デハ・ジャア
a2 話を再び始める機能	前と違う話を途中から始める.	転換型	サテ・トコロデ・デ
B 話題継続機能			
b1 話を重ねる機能	前の話を繰り返し，同じ話を続ける.	添加型／対比型／補足型	ソシテ・サラニ／マタハ／ナオ
b2 話を深める機能	前の話を言い換えて説明する.	同列型／補足型	タトエバ・スナワチ／ナゼナラ
b3 話を進める機能	前の話の結果や反対の話を述べる.	接型／逆接型／対比型	ソコデ／ケレドモ・ガ／ムシロ
b4 話をうながす機能	話が先へ進むように相手をうながす.	添加型／順接型	ソレカラ／ソレデ・デ・ダカラ
b5 話を戻す機能	一度それた話を再び元の話に戻す.	転換型	トコロデ／サテ・ソモソモ
b6 話をはさむ機能	前の話に関連する別の話をさし込む.	順接型／逆接型／補足型	ダカラ／ダケド・デモ／タダ
b7 話をそらす機能	前の話を避けて，違う話をする.	転換型／補足型	デ／タダ・モットモ・チナミニ
b8 話をさえぎる機能	相手の話を続けさせないようにする.	逆接型／補足型	デモ・ダケド・シカシ／ダッテ
b9 話を変える機能	前の話を切り上げて，違う話をする.	転換型／逆接型／補足型	トコロデ・ジャ／シカシ／実ハ
b10 話をまとめる機能	前の話をまとめて，しめくくる.	同列型／順接型／転換型	要スルニ／従ッテ・ユエニ／トニカク
C 話題終了機能			
c1 話を終える機能	話をすべて完了する.	順接型／転換型	コウシテ・トイウワケデ／ソレデハ・ジャア
c2 話を一応終える機能	前の話を途中で切り上げる.	順接型／転換型	ダカラ・ソコデ・デ／デハ・ジャ

以上は佐久間（2002：168）から引用　下線は筆者によるもの

この表によると、「で」は以下の機能を持つと考察される：「話を再び始める機能」、「話をうながす機能」、「話をそらす機能」、及び「話を一応終える機能」。佐久間（2002:170）の分析によれば、「で」は「話を重ねる機能」、「話を深める機能」、「話を変える機能」、「話を進める機能」を有しているとの指摘があるが、詳細な分析はなされていない。例えば、「話を再び始める機能」はどういったものかについての解説がない。また、これらの機能を分類する基準も一部明瞭ではない。例を挙げると、「話題開始機能」の下位分類の「話を再び始める機能」は「前と違う話を途中から始める」と定義されている。同様に、「話題継続機能」の下位分類の「話を変える機能」は「前の話を切り上げて、違う話をする」と定義されている。このように、両者は識別の基準が曖昧である。

以上の先行研究の問題点を簡潔にまとめると、会話文中の「で」に関する研究は、特定の視点から詳細な分析が十分に行われていない。そこで、本稿では、「談話資料における重要な分析観点の一つ」としての「文脈展開機能」を中心に据え、会話文中の「で」はどのような「文脈展開機能」を果たしているのか、その識別基準を具体的な例を用いて詳細に分析する。さらに、「で」が表面的に示す多様な機能の中から、その真髄的な役割や性質を探究する。

3. 調査データの概要と分析方法

3. 1. データの概要

本稿では、『BTSJ日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2021年3月版』（以下、「BTSJ」と呼ぶ）を利用して用例を収集する。

調査には、以下の会話のデータを使用している。

1. 同性友人同士雑談（男男）10会話、同性友人同士雑談（女女）10会話
2. 友人同士討論（男女）5会話
3. 論文指導（日本人教師男または女、日本人学生男または女）2会話
4. 初対面雑談（男男）5会話

選定した全32会話の総会話時間は11時間48分41秒で、総発話文数は18128である。

以上のデータを取り上げる理由は、上下関係、接触の状況、およびジェンダーといった要因を特定せず、接続詞「で」の示す「文脈展開機能」を多様な対話文脈において総合的に捉えることを目的としているからである。

3. 2. 分析方法

本稿では、佐久間（2002）の提唱する「文脈展開機能」を基軸として、「で」の会話における該当機能について詳細に考察する。その過程で、各機能の特性及び識別の基準も検討してみる。

4. 結果と用例の分析

4. 1. 結果

「で」の会話中の具体例を分析した結果、表2に示すように3つの大分類とその下の7つの「文脈展開」用法を提案する。具体的なデータや用例に基づく分析は、4.2節で詳述する。表2での分類法は、佐久間（2002）による「話題開始機能」、「話題継続機能」、「話題終了機能」という大枠を基にしており、その下位分類に関する機能の定義を部分的に修正し、またこれまでに指摘されていない各機能の特徴についても考察している。

表2　会話における「で」の文脈展開機能一覧

用法		定義	特徴	用例
話題開始機能		話を導入する	文頭で現れる。 会話の最初の部分で用いられる。 共有情報を前提とする。	(1), (2)
話題継続機能	話を進める機能	同じ話や関連する話を続ける	事柄を述べる時、節や文をつなぐ。「～て」、「から」などの連用節の後に現れやすい。「で」の連続がよく見られる。 文頭と文中の両方に現れる。	(3), (4), (5), (6), (15)
	話を変える機能	途中で前話との関連性がない話をする	文頭で現れる。	(7)
	話をうながす機能	話が前に進むように相手の発話をうながす	よく質問文と共起する。「で」は相手の話を受けとった標識であり、単独で用いられるが、目下の人や親しい関係に限られる。	(8), (9), (10)
	話を戻す機能	一度それた話を再び元の話に戻す	文頭で現れる。	(11)
	話をはさむ機能	途中で前の話との関連性がある別の話をする	よく質問文と共起し、短い発話である。	(12), (13)
話題終了機能		話を終了する	文頭で現れる。	(14)

4. 2. 用例の分析

本節では、表2の「で」の各用法を用例で示しつつ説明しておきたい。

4. 2. 1. 話題開始機能

「で」が用いられて話題を積極的に開始する。しかし、この機能は全ての状況で使用できるわけではない。話者の間に共有の情報がある場合にのみ用いられる。以下の例を使用して説明する。

(1) 1[3] JF145：あーごめん、待った?。[4]

2 JF146：<笑いながら>大丈夫。

3 JF146：何飲む?。

4 JF145：えじゃ、ちょっとコーヒー。

5 JF146：あーじゃ、コーヒー2つお願いします（うん）[店員に注文する口調で]。

6 JF145：**でね**（うん）、ちょっとメールでも多分、うん、言ったと思うんだけど…。

7 JF146：うん。

8 JF145：「人名1」さんに<笑い>お願いしてたバイトなんだけど…。

(293-21-JF145-JF146-1)

この例には、6から二人の会話が始まり、JF145は「で」を用いてアルバイトの話題を切り出している。さらに、「ね」との共起で相手の注目を要求する。また、このような話を切り出す用法には一定の制約があると考えられる。要するに、「で」を用いていきなり話の最初から全く新話題の導入は無理である。(1) には、「言ったと思うんだけど」という発話から、二人は事前にアルバイトのことをメールで話していたことがわかる。すなわち、接続詞「で」を用いて話題を導入する際、その導入される話題は対話者間での共有情報である必要がある。たとえば、「で」と共有情報の文脈と共起するのが自然なのに対して、聞き手にとっての新情報を伝える際には使用が難しいことが示唆される。

(2) 朝の出会いの場面

A：おはよう。

B：おはよう。

A：**で**ね、明日運動会があるじゃん。(共有情報)

(2)' A：おはよう。

B：おはよう。

A：?? [5] **で**ね、明日運動会があるよ。(聞き手にとって新情報)

---

[3] 分析の便宜上、連番「1、2…」は筆者によって発話に付与された識別番号である。

[4] 記号の意味はhttps://isplad.jp/about_btsj/を参考してほしい。

[5] 発話が不自然であることを表す。

（以上は作例）

佐久間（2002）では、この用法を「話を再び始める機能」と呼んでいる。また、この「機能」を果たすため、「何らかの前提条件」が必要であると指摘している。しかし、「何らか前提の条件」とは何かを具体的に述べていない。そこで、本稿では、佐久間（2002）と異なり、このような対話の最初に話題を導入する際に用いられる「で」を「話題開始機能」を呼び、適用条件の「何らかの前提条件」を「共有情報」として定義する。

4．2．2．話題継続機能

Ⅰ話を進める機能

この用法は事柄を述べる時、文や節を繋げていくことで、話を展開させていくものである。例えば、次の例である。

（3）1 JM002：＝学食とかどこにあるん?。
2 JM001：学食、あれ。
3 JM002：1個?。
4 JM001：あの辺。
5 JM002：1個?。
6 JM001：1個、い、2個。
7 JM002：うん。
8 JM001：「施設名2」、2階が、なん（うん）かね、すごいちょっと、椅子が高くて（あー）、なんか、ちょっとカフェ、カフェチックで（<軽い笑い>）、こういう格好で絶対行けないのが（うん）、2階<なのね>|<|。
9 JM002：<2階>|>|。
10 JM001：で、1階が（うん）、あのー、食堂んなっとって。
11 JM002：うん。

（001-01-JM001-JM002）

これは大学の食堂の話である。8で食堂の二階について話している。10から食堂の一階の話になっている。つまり、JM001が「で」の使用によって、食堂に関する情報を加えていく。

また、通常の会話における話の相関情報は一つとは限らないため、（4）のように「で」を連続して情報を次々に述べていく形式もよく見られる。

(4) 1 JM003:「人名7」、氏はー、なんかー、あれだー、あのーーーー、「人名8」先輩のー（うん）フェアウェルパーティーの、お別れ会のときにー（うん）、なんか、おれが手紙を、書く係りに任命されてー、匿名希望で。

2 JM004：うん、うん、うん、うん。

3 JM003：これ、結構内緒なんだけど。

4 JM003：うん。

5 JM003：内緒っつーか、別になんかねー、そう、お別れ会で誰か一人からー、ゆうせいの誰か一人からー（うん）、手紙をもらおうって企画があって、フェアウェルは毎年。

6 JM004：ふん、ふん、ふん、ふん。

7 JM003：**で**、「人名8」先輩の卒業んときは、おれがなんか書かされて。

8 JM004：ふーん。

9 JM003：**で**、そんときに、むこうから、「人名7」から手紙が来たの。

10 JM004：ふん、ふん、ふん、ふん。

11 JM003：**で**、『その節はお世話になりました』って書いてあった。

12 JM004：ふん、ふん、ふん。

(002-01-JM003-JM004)

この用法では、話し手が長い発話をする時、「で」が文中の「～て（で）」や「から」などのような連用節の後に現れる傾向が見られる。日本語母語話者の話し言葉には、例（5）、（6）に示されるように、話を途切れさせずに継続的に展開させるという傾向が観察される。このような現象は丸山（2014）では、「多重的な節連鎖構造」と呼ばれている。

(5) JF013：なんかねー、ちょ、そういうお客さんとー（うん）、ちょっと何かつり銭の受け渡しみたいのトラブルみたいのあってー（うん）、何かそれで、そんとき店長が偶然**いてー**、**で**、何かちょっと聞いてきたんだっ**て**。**で**、なんか“こうだったんですけど”とか言ってー、それで、何か、何か、“つり銭ちゃんと渡したの”とか（うん）、**聞かないでー**（うん）、**で**、そのあと、“あ、そうなの”って聞いてー、そのあと引っ**込んでー**、**で**、ずーっとその子の、もうその、レジの仕方をずーっと見てんだって。

(017-01-JF013-JF014)

(6) JM019：<それから>{>}会ってー、別に、なん、“なんかしてないすかー”とか**言ってー**、**で**、ない、最初、“大丈夫ですよ”みたいなこと**言っててー**、**で**、その後にー、チャリに乗ってたっていうのを**聞いたから**<2人で軽く笑う>、**で**、なんか、そのまた次会ったときに、“あれ、なんかチャリ乗ってたらしいっすよね”って、“あ、乗ってた、乗って

た”みたいな。

（010-01-JM019-JM020）

このような「多重的な節連鎖構造」には、「実時間内に即興で語りを構築していく場合には、ある節を産出した後、話している内容がまだ続くことを示すために、終止形ではなく連用節の形を取って、（つまり、主節として言い切るべき部分を動的に連用節に書き換えて）さらに後方に連鎖させる」ため、「明示的な文末表現による発話の切れ目」（丸山 2014：94-111）が少ない。したがって、長い発話をする時、話し手は逐次的に発話を産出できるため、聞き手の理解の負担を減少させるため、「で」を用いて小さい切れ目を作りながら、後方の内容が続くことを示すと考えられる。

Ⅱ話を変える機能

この機能は佐久間（2002）によって「前の話を切り上げて、違う話をする」という形で定義されているが、その機能についての詳細な分析はない。本稿では、途中で前話との関連性がない話をすることを「話を変える機能」と定義し、例（7）に基づいてその実例を考察する。この例において、話し手は「で」を使用して、既存の内容とは無関係な「就職」という新しいテーマに移行している。

（7）1 JMR003：え、別にやるんだったら、いいけど、どこでやるの?。
2 JMC003：うん、どこだろうね、普通に、どっか、「地名1」とかで、別に「地名2」でもいいだろうし。
3 JMR003：あ、俺は別かまわんよ。
4 JMC003：うん、分かった。
5 JMR003：どうせこん####暇だし。
6 JMR003：うわ、最悪。
7 JMC003：<笑い>。
8 JMC003：あ、なんだ、「友人の名前2」実家帰ったんだっけ?。
9 JMR003：もう1回帰っちゃったから、帰んなんくていいんだよ。
10 JMC003：うんー。
11 JMC003：え、<u>で</u>、就職活動はどうなの?。
12 JMR003：あ、就活はもう、リクナビに登録する。

（094-05-JMC003-JMR003）

Ⅲ話をうながす機能

（8）1 JM002：これ、何が見える?。

2 JM001：あんねー、とりあえずあれがー（うんうん）、うちの図書館??。

3 JM002：うん。

4 JM002：でかいねー。

5 JM001：ちゃう、あれだよ、ゆっても、国公立大で一番（うん）コンピューターのある大学らしいから。

6 JM002：あ、そうなん?。

7 JM001：めちゃめちゃある[強調して]。

8 JM002：そうなん?。

9 JM001：マックとウィンドウズと（うん）両方めちゃくちゃあって。

10 JM002：で、あっちは?。

11 JM001：あれがー、「施設名1略称」、「施設名1」っていう（うん）、うん、おれもよく分からん=。

12 JM001：=行ったことがない。

（001-01-JM001-JM002）

この例では、9までの発話はJM001が大学の施設について紹介している。10でJM002が「で」で相手の話を受けとった後に、「あっちは」という質問文でJM001の発話を促している。また、今回の調査では、「話をうながす機能」は友人関係のデータにはあるが、初対面の雑談の5会話には見当たらない。これは促すという行為は親しくない人間関係に対して、あまり配慮がない行為であるため、聞き手のフェイスを侵害しないようにその使用を避けているためだろう。さらに、このようなうながす行為は目上の人々に対しては適用が難しいとされる。例えば、(8) の会話において、JM001が教師で、JM002が生徒である状況を想定すると、「で、あっちは?」という発話は、社会的な文脈において不適切であり、失礼と捉えられる可能性が高い。

「で」のみで「話をうながす」行為は可能であるものの、本稿で取り上げたデータにそのような例は確認されなかった。この現象は、後続の文脈が不在であるために、「で」の単独使用がより非礼として解釈されやすいからであると推測される。同じように、親しい関係者同士の間では比較的に容認され得るものの、親しくない関係や初対面の状況、さらには目上の人への発話の文脈においては、その使用は礼儀に反すると考えられる。例えば、以下の例である。

(9) 親しい関係/目下の人に対する

A：昨日何やった？

B：昨日、浅草に行った。

A：で？

B：ラーメン食べた。まじで美味しかった。

（10）初対面/親しくない関係/目上の人に対する

A：昨日何されました？

B：昨日、浅草に行きました。

A：??で？/えー、なるほど、浅草で何をされましたか？

B：ラーメンを食べました。とても美味しかったです。

（以上は作例）

Ⅳ話を戻す機能

（11）1 JF184：《沈黙2秒》そうでもがんばって昨日、一昨日か鍋して片付けたから。

2 JF185：あそこで?。

3 JF184：うちで。

4 JF185：あー<笑い>。

5 JF185：いいねーなんか。

6 JF184：鍋。

7 JF185：鍋したーい。

8 JF184：鍋したい。

9 JF184：《沈黙2秒》きりたんぽをしようとしたけどあんまきりたんぽに仕上がらなかった。

10 JF185：きりたんぽってどーいうの?。

11 JF185：お米<だよね>|<|。

12 JF184：<あっそう>|>|お米のやつはーきりたんぽは元々スーパーに売ってたから<それを買ってー>|<|。

（中略、この後、米と酒に関する話がしばらく続いている。）

13 JF185：んー。

14 JF184：《沈黙3秒》でさー、毎週鍋やってる、来週も鍋なんだよね。

15 JF185：<笑い>いいね。

（331-23-JF184-JF185）

1からJF184が鍋の話題を導入している。しかし、途中で9から米と酒の話になっている。つまり、話が一旦それている。このあと、14でJF184が「で」で鍋の話を再び言及し、それた話から元の話に戻している。

V話をはさむ機能

この用法は基本的に、話し手が突如として思い出した現在の話題に関連する情報を一言で提供する形である。この場合、話し手自身がはさむケースが存在する一方で、聞き手からのはさみも観察される。

（12）1 JM008：《沈黙5秒》「学科名」全員ー、は、行ってんの?。
2 JM007：知らない。
3 JM007：だいじょぶなのか、あれ、ほんとに。
4 JM008：なんか、危なそう<やんな>{<}。
5 JM007：<怪しく>{>}ない?、あれ。
6 JM008：聖書読んでんの?。
7 JM007：英語で聖書とかいってさー（あん）、あのー、ね。
8 JM007：普通のさー（うん）、しゅう、し、キリスト教系ならいいけどー、あやしいキリスト教系もあるからさー、中には。
9 JM008：うーん=。
10 JM007：=で、「人名16」、「人名16」いるじゃーん?。
11 JM008：ああ。
12 JM007：「人名16」は、最近カトリックんなったらしいんだわー。
13 JM008：うーん。
14 JM007：でー、カトリック、いいんだけどー、変なカトリックもあるからー（うん）、なかなか危ないんだよね。

（004-01-JM007-JM008）

この例では、二人はキリスト教について話している。「人名16」はキリスト教と関係しているため、「で」を用いて「『人名16』いるじゃーん?」という一言で人物16の話をはさんでいる。また、「話をはさむ」という行為についても考察すると、この行為は主要な話題に関連した内容を提示しつつ、その主題からわずかに逸脱する特性を有している。この逸脱は聞き手に対する配慮から生じると推測され、その結果、この種の発話と質問文との共起が頻繁に観察される。

（13）1 JM004：=残念ながら、私は昨日、「人名15」さんを怒らずにはおれなかった。
2 JM004：って、そんな怒ってないけどー。
3 JM004：ちょ、ちょっとまずいだろぐらいは言ったけど。
4 JM003：うん、部長として?。

5 JM004：うん。

6 JM003：うん、まー、それはあるかもしんないね。

7 JM004：うん。

8 JM003：あー、でも、それは正しいかも。

9 JM003：だって、ぶ、うん、あー。

10 JM004：でもねー、やっぱねー、重荷ではあるとは思う＝。

11 JM004：＝やっぱ、何だかんだ言ってすごいがんばったじゃん。

12 JM004：何だかんだ言ってか、普通にがんばってくれたからさー。

13 JM004：でー、例えば、今の状態ってー、1年生の2年生に対するイメージってそんなよくないでしょ?、女性に関しては（うん）、はっきり言って。

14 JM004：だ、すごい大変だとおもうのね。

15 JM004：逆に今がんばんないとー、けつ、そっぽ向かれちゃう可能性すらあるからー<笑いながら>、ほんとに[「すら」を強調して]。

（002-01-JM003-JM004）

4．2．3．話題終了機能

（14）1 JMT002：《沈黙15秒》はい、じゃ、まあ構成としては、まあ、これでいいと思います＝。

2 JMT002：＝別に問題ない、問題となるところはないと思うし。

3 JMT002：それから今、あのー、2人でこう話し合ったことをー、あのー考慮しながら、ね、こん中に入れながら、こう、あのー、修論を書くっていうこと、ですね。

4 JMT002：はい、こんなもんでー、<いかがでしょうか>|<|?。

5 JFSt003：<あ、はい、はい>|>|、ありがとうございました<笑いながら>。

6 JMT002：《少し間》で、終わります<2人で笑い>。

（045-03-JMT002-JFSt003）

この例で、JMT002は「で」と「終わります」という表現で会話をすべて終了している。

4．2．4．まとめ

以上の分析では、具体的な使用例を基に、「で」が会話文脈において果たす7つの「文脈展開機能」について検討した。これらの機能を果たすため、「で」はしばしば何らかの表現に添えて作用している。例えば、「話をうながす機能」には、質問文と頻繁に共起する傾向がある。また、同性友人同士雑談（男男、男女）20会話の中で見られる7例の促す文は、すべて質問文の形式を取っている。

さらに、例（5)'のような「話を進める機能」に、「で」は「なんか」という「間繋ぎ語」[6]（中島 2011：204）のフィラー、「そのあと」という接続表現とともに次の発話の進行に活用されている。

(5)' JF013：なんかねー、ちょ、そういうお客さんとー（うん）、ちょっと何かつり銭の受け渡しみたいのトラブルみたいのあってー（うん）、何かそれで、そんとき店長が偶然**いてー**、**で**、何かちょっと聞いてきたんだっ**て**。**で**、なんか“こうだったんですけど”とか言ってー、それで、何か、何か、“つり銭ちゃんと渡したの”とか（うん）、**聞かないでー**（うん）、**で**、そのあと、“あ、そうなの”って聞いてー、そのあと引っ**込んでー**、**で**、ずーっとその子の、もうその、レジの仕方をずーっと見てんだって。

(017-01-JF013-JF014)

5.「で」の本質

前述の観察の結果をもとに、会話文脈における「で」が果たす多様な機能を検討したが、その多様性の背後にある「で」の根本的な機能とは何かを本節で考察する。先行する議論を総括すると、「で」は主に二つのカテゴリに区分される。以下、それぞれ「で①」と「で②」として説明を行う。

「で①」前の文脈を受け取る型

このタイプの「で」は、「自分の話を受け取る」「で」と「相手の話を受け取る」「で」に分けられる。この性格はやはり従来「接続詞」としての文脈をつなぐ機能と関係していると考えられる。

「話をうながす機能」は典型的な「相手の話を受け取る」の「で」に該当する。「で」という接続詞が存在しなければ、文の意味が変容する。たとえば、例（8）で「**で**、あっちは」の「で」は相手の話を納得したうえで受けとったという標識であり、対人的要素が含まれる。仮に、「で」がなければ、「あっちは」だけで、相手の発話の受容の有無が示されず、それは単なる質問文として解釈される。さらに、先述した「話題開始機能」における「で」の使用については、「共有情報」が不可欠であると述べた。この「共有情報」には、相手の発話も含まれる。従って、「で」は「相手の発話を受け入れる」という性質を持ち、単純に話題を開始する「さて」とは異質であることが確認される。

一方、「自分の話を受け取る」「で」は「話を進める機能」によく現れる。例えば、次の用例である。

---

[6] 中島（2011:204）では、発話中に出現する「なんか」は「話し手は発話の途中においてどのように次の発話を展開させていくかを考えるためにポーズ（間）を置く。そのポーズ（間）を埋めるためにフィラーが出現する。フィラーで間をつなぎ、次の発話の展開を整えるのである。」と述べられている。

(5)” JF013：なんかねー、ちょ、そういうお客さんとー（うん）、ちょっと何かつり銭の受け渡しみたいのトラブルみたいのあってー（うん）、何かそれで、そんとき店長が偶然いてー、**で**、何かちょっと聞いてきたんだって。**で**、なんか“こうだったんですけど”とか言ってー、それで、何か、何か、“つり銭ちゃんと渡したの”とか（うん）、聞かないでー（うん）、**で**、そのあと、“あ、そうなの”って聞いてー、そのあと引っ込んでー、**で**、ずーっとその子の、もうその、レジの仕方をずーっと見てんだって。

（017-01-JF013-JF014）

（15）1 JM006：高1の終わりぐらいに（うん）、バトミントン関係でー、（うん）付き合ってたんだけど＜笑い＞（うん）、段々さ、高2になってさ（うん）、ぼろくそになってくんだよ＝。

2 JM006：＝なんか、成績とかもさ（うん）、とりあえずよかったじゃん。

3 JM005：うん。

4 JM006：あー、これ、安泰だなみたいな＜少し笑いながら＞。

5 JM005：うん。

6 JM006：**で**、部活も結構行ってるじゃん。

7 JM005：＜うん＞|＜|。

（003-01-JM005-JM006）

この2つの用例の「で」はすべて話し手自身の発話を受けとっている。これから話す内容は前の内容の続くことを示す。このような「で」は主に自分の発話の産出に役立つ。(5)”のような中断なく話すタイプには、先行する発話内容を確認しつつ、後続の発話内容を形成・展開していく様子が観察される。一方、(15）では相手の応答の後に用いられ[7]、発話権を維持することを重視しつつ、発話が産出されている。

「で②」前の文脈との「区切り」をつける型

該当の「で」のタイプは、先行する発話内容を受け取ることよりも、むしろ後続の文脈を示唆しているといってもよい。この性格は指示部「それ」、「そこ」の脱落と関連があると考えられる。つまり、「で」は前文脈との「区切りをつけ」（小出2008：38）ている。代表的なものは例（7)「話を変える機能」が挙げられる。「え、**で**、就職活動はどうなの」、という表現には、「で」は直前の文

[7] 中島（2011）では、「先行相手の応答の後の発話頭に現れ」る「で」は、「発話権を維持する」という機能を果たすと指摘されている。

脈との「区切り」を示しがなら、後の話を変えることに下拵えをする。同様に、「話を戻す機能」に、「で」は現在話している話との「区切り」をつけて一度それた話に戻ることを予告している。

「で」がこのように異なる性質を兼ね備えているのは、接続詞「それで」または「そこで」の短縮形に由来している可能性が高いと推測される。これらの接続詞に由来するため、先行文脈を参照する能力が存在する。一方で、指示部分としての「それ」や「そこ」が省略される過程で、先行する文脈を明示的に参照せずとも使用できるという性質も獲得されたと推察される。この点において、その使用法は多様性を呈している。

ここで、これまでの観察を通して明らかになった事実に基づき、「で」の本質的機能に対する本稿の捉え方を改めて提起しておきたい。

（16）会話における「で」は二種類が分けられる。「で①」の「前の文脈を受け取る型」と「で②」「前の文脈との『区切り』をつける型」である。この性質は、接続詞「それで」または「そこで」の短縮形に起因しているとの仮説が提案されている。

また、「で①」の中には、「相手の話を受け取る」ものと「自分の話を受け取る」ものに分けられている。各「文脈展開機能」は対応している「で」の類型は以下のようである。

表3 文脈展開機能における「で」の類型

文脈展開機能		「で」の類型
話題開始機能		「で①」相手の話を受け取る
話題継続機能	話を変える機能	「で②」
	話を進める機能	「で①」自分の話を受け取る
	話を促す機能	「で①」相手の話を受け取る
	話を戻す機能	「で②」
	話をはさむ機能	「で②」
話題終了機能		「で①」相手の話を受け取る

6. おわりに

本稿では、佐久間（2002）の提唱する「文脈展開機能」を基盤として、会話中における「で」の複数の機能及び特性について考察を行った。また、一見、多様な機能を持つかのように思われる「で」であるが、本質的にはその使用法は二つの類型に分けられる。

しかし、調査結果には、「でー」や「でっ」といった表現と、「でさ（—）」や「でね」との共起が数多く確認される。現在の分析において、これらの表現に関する研究はまだ十分ではない。将来的には、これらの表現を別個に、更に詳細に検討することが研究課題となっている。一方、本稿で

は、特定の用例を基に「で」の「文脈展開機能」について考察しているが、その量的な側面の調査は不足しているため、「で」の使用実態を完全に明示することは困難である。この問題点を解消するために、今後は多くの実例を通しての分析を行い、親疎、上下関係、話題の内容といった側面からの深い考察を追求すれば、「で」の使用状況を更に明確化できると期待される。

参考文献

石島満沙子・中川道子（2004）「日本語母語話者の独話に現れる接続詞「で」について」『北海道大学留学センター紀要』8 北海道大学 pp.46-61

市川孝（1978）『国語教育のための文章論概説』教育出版

宇佐美恵子（2013）「接続詞「で」の指導に関する実験的研究：インプット洪水･インプット強化･明示的な文法説明の効果」『第二言語としての日本語の習得研究』16　第二言語習得研究会 pp.196-213

権景姫（2003）「接続表現「で」の意味機能」『日語日文學研究』45 韓国日語日文學会 pp.121-141

小出慶一（2008）「発話行動における「で」の役割 :「で」のフィラー化をめぐって」『埼玉大学紀要（教養学部）』第44 巻第2号 埼玉大学 pp.27-40

佐久間まゆみ（1992）「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学文学紀要』41 日本女子大学 pp.9-22

佐久間まゆみ（2002）「3 接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店 pp.119-189

椙本総子（1994）「談話標識の機能について－ソレデ･デを中心として－」『日本語･日本文化研究』第2号 京都外国語大学留学生別科 pp.33-44

高橋淑郎（2001）「談話における接続詞「で」の機能」『國語學』52 日本語学会 pp.98-99

中島悦子（2011）『自然談話の文法―疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞』おうふう出版 pp.179-213

深川美帆（2007）「接続表現から見た上級日本語学習者の談話の特徴-日本語母語話者と比較して-」『言葉と文化』8 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本言語文化専攻 pp.253-268

丸山岳彦（2014）「現代日本語の多重的な節連鎖構造について-CSJ と BCCWJ を用いた分析」『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp.93-114

百瀬みのり（2020）「日本語接続詞の通時的研究 -日本語接続詞の成立と展開-」大阪大学大阪大学大学院文学研究科博士論文

山本貴昭（2004）「談話における接続詞「で」の用法―女性話者の談話を対象として」『国文学攷』181 広島大学 pp.13-27

コーパス

宇佐美まゆみ監修（2021）『BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2021年3月版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」

辞書

北原保雄（1981）『日本文法辞典』，有精堂出版

山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之　編（2020）『新明解国語辞典（第八版）』，三省堂出版

新村出　編（2018）『広辞苑（第七版）』，岩波書店